

三十七 独り歩む精神をたどる

時間が限られていることやほかの条件を考慮すれば、これまでに読んだ書物の中で重要なものを読み直すことも大切だと気づいて、夏にスピノザとカントの哲学に耳を傾けたら、初冬になってもまだカントの慈光がとどまっただけで、『カントの生涯と学説』を読んでみようという気になった。以前にカントの人となりや生活を知りたいと思ったときには、その書物に立ち向かう元気が足りなくてためらったのだった。著者E・カッシーラーの著作はいくらか読んでいた。この人の綿密さからして得られることが多いはずだ。

実際、そのとおりになった。カッシーラーは、書名の最初の語「生涯」よりもむしろに置く語「学説」の解説に力を尽くしている。そうしながら、カントが彼の哲学をたゆまず探求・開拓して築き上げ、その思想全体を生き方そのものとして体現したことを明らかにする。エピソードの紹介を切りつめたこの書物が、どんな伝記よりも充実した「生涯」の記述になっているのだ。これこそ、カントが「いかなる業績を後世にのこしたか、十分に書き上げた」書物、と言うことができる。

緒論が人間の「生涯」を見極める大事な視点を教えてくれる。課題を「カントの学説の

形式に呼応する『生の形式』を発見し、これを明瞭に示す点にある」とし、一般的に有益な命題を述べる。すなわち、「思想は、生にみずからの形式を与えると同時に、逆に生から生それ自身の形式を取り戻すのである」と。また、デカルトの範例をあげて、「觀念的なものと実在的なもの、世界像と生の形姿とは、それぞれ同一不可分の精神的發展過程の契機となっている」と。凡人もときどきこういうことを考えなければならぬ。

この書物は、カントの主著である三つの『批判』の書を、その要点を漏らさず十分に論述し的確に解説する。一つひとつの重要概念の成熟を、その途上で発表された論考も紹介しながら、ていねいにたどる。単なる解説に終わらない論述は、自身もすぐれた哲学者であるカッシーラーが、自分の頭で考察しながらかみくだいて、全体としてのカントの思想を再構築するという書きぶりである。そこにはカッシーラーの解釈が入りこまざるをえないが、たしかにカントの思考の發展を忠実に記述しようとしている。つまり、この書物は批判哲学のすぐれた総括になっている。わたしは、これを読んで、自分の不十分なカント理解を一步進めることができたと思う。

『純粹理性批判』で議論された理論理性性について、カッシーラーは、二十世紀の前四半世紀までの自然科学の發展を目撃しながら、大部の著作となるはずの『認識問題』を出版

しさらに考察しつつあった。『カントの生涯と学説』はその考察の成果を取り入れていると思う。ヨーロッパ哲学の伝統の中に生きたカントは、ギリシア以来発展した思想の批判によって自己の哲学を築きあげていたので、体系の完全性を追求してやまないその姿勢から、「存在」の「根源者」あるいは「絶対者」を位置づけずにはすませない。だが、カッシーラーは「根源者」や「絶対者」を焦点とする議論を展開しない。カントの主意を、——「『自我』でさえ、カントにとって演繹の目標であつて、その出発点ではない」。『経験的自己意識は、経験的対象意識に時間的・事態的に先行しない。むしろ客観化と規定との同一の過程において、我々にとって経験の全体が『内的なもの』と『外的なもの』、『自我』と『世界』の範囲へとわかれるのである」とし、「魂の概念はただ理念における実体のみを言い表わし、實在における実体を言い表わさない」と整理する。宇宙論的理念についても、「我々がいつか最終項に到達することはない」こと、「経験認識の永続的課題をなす存在の総体性を、存立する与えられた客観となすならば、直ちに超越的となる」と、超越を戒める。そして神学的理念について、カントの批判が「すべての合理的神学がこれまで依拠してきた全存在論的推論を無力化」した、と判定する——。カッシーラーの総括が、わたしのカント理解を強固にした。あいかわらずおぼろげにしか見ないけれども、世界と自分自身に対する立ち位置でぐらつくことがないようにしよう。

だが、生きている人間の理性は、いつもどのようなように行動すればよいかという問いに直面する。それは、真摯に生きるカントにはとりわけ重大な現実的な問題だった。「実践理性」こそ、理論理性を整理し終えたら、取り組むべき主題であった。それを、カッシーラーは批判的倫理学と呼ぶ。道徳性は人類が直面し続けてきたことがらで、「新しい原則を導入し、初めて発見しようなどとする」必要はない。カントの倫理学は「形式」を提出するのである、道徳の法則をあの名高いがだれもが忘れがちな定言命法として。そしてその形式こそが、理論理性と矛盾しない実践理性を定立させるのである。

カッシーラーの論述をつないで、わたしは次のように了解する。「人間が、自分自身を自由に作用する原因であると意識する」事実をひき受けて、カントは倫理学の根本に、「自律の概念」を採用し、「自由と切り離せないものとして道徳的法則」を置く。人間は、「その自由を因果性の概念とただ結びつけるだけで、これを越え出ないようにして、二重の仕方で表象し考えなければならぬ」のだ。その外に規定根拠を求めることは断念しなければならぬ。カントは、「神と不死の確実性を要請すること」で倫理学の展開を完了するが、知の終わるところで「道徳的理性信仰」が始まる。「不確実性という契機こそ、決意と行為という色彩を与えるのである」。この決意と行為から生まれる理性の実践が我々を導く——と。

人間は、理論理性や実践理性を狭く限界つけて生きるのではない。そこにつながる人間の本性へと、カントの哲学的な思索は続き、『判断力批判』が著わされた。「判断力は、自然に対してではなく自己自身に対してのみ法則を与え、判断力の固有の考察方法を提示する」のだ。人間が自然に対して「合目的性」や「芸術性」を見ることから、さらに、人間の芸術や美学までを、深く位置づける。カントにとつて、「あらゆる判断は純粹自発性の作用であり、芸術という事実は自然と自由との新しい統一を指示する」。そして、「目的は我々の判定が現象の全体にあてがう精神的な連結である」…。

カントの有機的生命についての考えは、「自然が悟性にとつて、明瞭な概観しうる統一へ初めてまとまるのは、我々が自然を併存する諸形式の固定した存在と把握するのではなく、自然をそのたえざる生成において追求するときだけである、という根本思想」に基づく。その思想がどれほど到達力をもっていたかは、のちの進化論と見まがうほど見事な洞察に現われている。カッシーラーが「個別的観察の鋭さと想像力の総合的な力、直覚の大胆さと判断力の批判的慎重さ」と感嘆している。「もし我々がただ生命の諸形式の総体とその段階的分節化とだけを、直感的明晰さと概念的秩序とのうちに眼前に見ることができるとすれば、我々は生命がどこから由来するのか、を問う必要はない」のである。このカッ

シーラーの受けとめをかみしめることにしよう。「自然的生命と精神的生命との全体を概観し、これを内側から理性の唯一の有機体として把握すること！」

三つの『批判書』のあとも、カントの思索はやむことがない。「単なる理性の限界内の宗教は、純粹な道徳の内実以外のいかなる他の本質的な内実をも有していない」とするカントは、伝統的な宗教に反対する立場に立ち、プロイセン政府から宗教に関してさらなる論述の差し止めを命じられるほどだった。しかし、ルソー像を壁に貼り、フランス革命を「より善きものへの進歩を希望させる」とした人は、「自由の精神」を働かせることに倦むことがない。明晰な哲学的頭脳が、国家や法、社会契約を最も根源的な深みで考察し整理する。つつましく静かに暮らしたが批判的に物事を考えた人にくらべて、今日、人間の自由から目をそらし、それに反する立場にあまんじる知識人のなんと多いことだろう。

ところで、それまでの形而上学を構築しなおそうとしたカントの哲学は、観念論的な前提から出発して体系づけられた。しかしカントは、「知ることのできない物自体」を放棄しない。カント以降のドイツ観念論は、物自体を否定したが、カントの戒める超越へと進んでしまう。「物自体」はそういう観念論への超出を戒める結果と考えることができる。

この保留は、科学を全能とする越権に対しても結界として働くと考える人もあるそうだ。カントは「超越論的観念論者が経験的實在論者でありうる」とも言っている。発展した現代科学を受け入れる立場は、こういう意味あいの実在論だろう。物理学の発展を知っているカッシーラーは、物理法則が関数関係としてあると言う。しかし、古典的な粒子が量子力学で波動的なものになっても、法則は事物の関数関係として表現され、現象の認識において経験を支える事物性は失われることがない。物理学者のはしくれであるわたしは、哲学者ほどうまく言えないが、この事態を「唯物論」の見方でとらえている。晩年のカントが取り組んだ『自然科学の形而上学的原理から物理学への移行』というタイトルも、この方向へ進んでいたのではないかと思わせる。「進化論」をあれほど見事に構想した人と現代の分子生物学者とのアプローチに、差異を見つけることはむずかしいだろう。

「批判的反省のすべての段階を一巡した思考過程の所産」によって、カントは、認識においても行為においても、純粹な此岸への方向をとった、とカッシーラーは言う。敬虔なプロテスタントの家庭に育ったカントは、思索を深めつくして、古い形の宗教を越えたのだ。超越を断念することは因果の系列を無限にさかのぼることを断念することに等しく、世界が時間的あるいは空間的に無限か有限かを論ぜず、不死の靈魂や世界の根源者につい

て沈黙を通したゴータマ・シッタールタと同じ位置に立っているのだ。カントは、その決意の上で、「批判的反省のすべての段階を一巡した思考過程」を経て、世界に立ち向かう足場を整えたのだ。「蝶の雑記帳二十五」で引用したレヴィー・ストロースの「書物で読んだ哲学者から、西洋が誇りとしているあの科学からさえ、賢者(仏陀)の樹下の瞑想を接ぎ合わせて編集した教訓の断片のほかのなにを教えられたらろうか」という問いは、この足場からの実践の重要さあるいは困難さ以上のことを言っているのではないだろう。「蝶の雑記帳三十三」での師への問いかけは的外れだったわけだ。カントの歩みは、人間の認識が進んだ近代の戸口で、ゴータマ・シッタールタの「ただ独り歩め」という勧めの見事な実践で、人間の哲学的な知識を大いに充実させた、とわたしは思う。

学説の展開をたどってカントの生涯を描くこの書物は、独りの人間の精神史を語るだけでなく、その歩み行きをたどることによって、ヨーロッパの一連の主要な精神史をも明らかにしている。わたしは、すぐれた精神史の書物をひもといたことに満足した。カントはその哲学を自ら生きたのだ。カッシーラーは、カントの哲学を「人間の哲学」と呼び、そのすぐれた人格性を多くの言葉で称揚している。第一に思い浮かぶ「思索の冷静な厳密さ」に加えて、「思索における純真さ」、「意欲の高揚および感激」…などを挙げる。そして、

カントの生活を、「瞑想的であると同時に活動的な生活であり、最も身近な日常的義務の範囲に制限されながらも最も遠く展望しうる生活」と見る。

わたしは、その人となりと生き方に尊敬の念をますますつのらせて、インターネットでカントの像を探した。歴史の転変によって今はロシア領となったケーニヒスベルクに、人類の偉大な師の銅像はなお立っている。その写真をプリンターで印刷し、書斎の壁の以前からあるモンテーニュ像のそばに貼った。カッシーラーも、カントとモンテーニュとのあいだには両者を結びつける特徴があった、と指摘する。たとえば「知恵」について、モンテーニュが「我々が知恵ある者となりうるのは我々自身の知によってのみである」と説けば、カントが「真の知恵が簡素の侍女であり、そこでは心情が悟性に指図を与えるから、知恵は概して学識の大げさな準備やすべての騒々しい学説を無用のものたらしめる」と説く。悟性によってあれほどの学説を築いた哲学者は、深く心情の人でもあった。「アエテ賢クアレ」という師の勧告がいつも聞こえますように。

二〇一六年、二月

意を尽くしていなかった二、三の文を修正した。二〇一六年、八月

付記

カッシーラーの記述は、カントへの尊敬と敬愛の情に満ちている。そして、カントの哲学の進展を追ってヨーロッパの先哲たちに言及するなかでも、ドイツの生んだライプニッツやゲーテやシラーなど、ドイツ人の誇る人たちへの尊敬がにじんでいる。彼がドイツ人の中でも粹を究めたドイツ精神の持ち主だったことが分かる。その人がユダヤ教徒の血を引くという理由で国を追われた不条理を考えずにはおれない。それを主導した者たちを悪人と非難することが必要だけれども、民衆がその政権の成立に手を貸したことを忘れてはいけない。現代でも、この国であるいはほかの国で、外国をとりわけ関係の深い外国人を嫌い敵対的な感情を煽る人々がいる。わたしたちはいつのまにかそういう感情に染まりがちだ。カントの「未成熟は自分に責任がある、脱するにはアエテ自分の悟性を用いる勇氣をもて」という啓蒙の勧めは、「人間の全歴史の標語である」とカッシーラーが言う。